名古屋芸術大学研究紀要第43巻　045～056頁（2022）

音楽療法士とクライエントという関係性と場を捉えなおす試み
― コミュニティ音楽療法の観点から再考する ―

An Attempt at Recapturing the Relationship between Music Therapist and Client and the Field of Practice
— Rethinking from the Perspective of Community Music Therapy —

柴田　朋子　*SHIBATA Tomoko*
（音楽領域）
伊藤　孝子　*ITO Takako*
（音楽領域）
杉田　政夫　*SUGITA Masao*
（福島大学）

１．はじめに

筆者（以下、筆者とは筆頭者の柴田を指す）は、個人音楽療法実践を十数年間継続する中で、療法室内で生じる事象を考える際に、音楽療法士（MT.）とクライエント（Cl.）の二者関係に焦点化されて語られがちなことに徐々に疑問を抱くようになっていた。「この場所で、この限られた関係性のまま活動を継続していてよいのだろうか」、「ここで起きていることを音楽療法士だけに留めておいてよいものだろうか」といった場や関係性、参加のあり方について逡巡する中で、これまでの個別音楽療法の形態のみでは解決できない課題があるとの思いに至るようになったのである。これらの問いや思いが意味することを実践的に検討するため、Cl. と保護者とともに、従前までの個人音楽療法とは異なる形態の新たな活動を試みることにした。本稿は、この試みのひとつである「仕事」をテーマに構想した実験カフェという活動（2019年３月）についてその背景と内容を記述し、そこでの事象についてコミュニティ音楽療法の観点から考察することで、音楽療法実践において筆者が抱いてきた疑問について省察することを目的とする。

２．背景

最初に、実験カフェが考案されるきっかけとなったMT.（柴田）と２人の Cl. の背景について記述する。

2.1　企画に至った MT. の背景

筆者は個人音楽療法を継続する中で、特に成人期を迎える Cl. の姿から、「いまこの場での Cl. の姿は、音楽療法以外の場でも表出されているのだろうか」「いまここで起きていることが、Cl. はもちろん関わっている人たちにも同じように経験できるような場がつくれないだろうか」という漠然とした考えを持っていた。Cl. との関わりの中で、変容を

迫られる対象が、Cl.側に固定されていることへの違和感のようなものがあり、そこからMT.の役割は何だろうか、Cl.とどのような関係性であるべきか等、様々なことを検討しつつ実践を行ってきた。そして「Cl.が抱える困難さはどこから生じているのだろうか」「Cl.が抱える困難さがあるとして、それはCl.のみが解決する問題なのか」「個人だけで解決されるものではなく、クライエントを取り巻く環境との相互関係の中で生じていることが多くあるのではないだろうか」という考えに至った。

加えて、社会において多様性を認める重要さが唱えられるようになった現在でも、学校をはじめとする様々な場面で障がいの有無によって区分され、日常的な接点を持ちにくい状況は依然として存在しており、そのことによって障がいについての理解や価値観の深まりが得られにくいのではないかという問題意識を長く抱いていた。このような問題を、Cl.や周囲の人々と共に考え、これまでとは異なる枠組みで関係性を構築することのできる場を創出するために、音楽療法士としてのこれまでの経験を活かすことが出来るのではないか、と発想したことが、実験カフェという新たな試みを計画・実践する発端となった。

2.2　Aさんの背景

活動当時は23歳で、出生時に脳室拡大と診断された、知的障がいのある女性である。幼少期から自宅での個人音楽療法を実施しており、Aさんが学齢期の時に筆者が前任者より引き継ぎ、月に2回の実践を現在（2021年10月時点）も継続中である。

特別支援学校の卒業を機に、母親より「休日に本人が継続的に楽しめる場所へ出かけるために音楽療法の場所を自宅以外に設けてもらえないだろうか」という要望があった。この要望には、在学中は学校の他に、児童デイサービスの定期的な利用や、イベント行事への参加、職員さんとの交流等々を楽しみにしていたが、高等部を卒業後はそれらの場所や交流がほとんどなくなり、居場所や移動が制限されてしまうという生活上の問題という背景があった[1)]。

また、Aさんは高等部卒業後、ある就労支援事業所に通所し始めそこの業務のひとつである接客業を希望していたのだが、事業所から業務内容としてAさんには困難と判断されるという出来事があり、その後気分の落ち込み等が続いていた。就労支援期間を終え、新しい事業所へ移行し現在まで約6年間通っているが、接客業には今も携わっていない状況である。

Aさんは笑顔がとても印象的な人物で、挨拶や、ひらがな・片仮名・簡単な漢字の読み書き、会話が可能である。Aさんの状況理解や行動表出は、関わる側の働きかけの微細な

1）高等部卒業後の就労先以外の行先（余暇）の不足に関する問題については、広く指摘されている。例えば、栗林睦美ら「特別支援学校卒業後における知的障害者の就労・生活・余暇に関する現状と課題―保護者を対象とした質問紙調査から―」『富山大学人間発達科学部紀要』第12巻第2号、2018年、135～149頁を参照。

違いで変わってくることが多々ある。また、緊張や不安によって、本来は出来ることが出来なくなることが多くあるため、Aさんに対する印象は個人によって差があり、Aさん自身もそれを敏感に感じ取っているような様子であった。

個別音楽療法では主に、共作での作詞・作曲、オリジナル楽譜によるピアノ演奏を行っていた。音楽療法の時間の中でAさんは、MT.への呼称を「○○先生」から「○○（苗字）」「○○（名前）」または「○○（名前）ちゃん」と自ら変える、「今日何食べたの？」「何をしていた？」「○○（MT.）の話が聞きたい・歌が聴きたい」「一緒に○○へ行きたい」等、MT.に対する興味・関心と捉えられる言動が現れるようになっていた。MT.に対してからかいのような言動、身体を寄せるといった行為も現れていた。筆者は、これらの行為からCl.が求めているのは、音楽療法士とクライエントという関係性ではなく、対等な立場であり、友人のように好意的な交流ではないかと推察していた。

2.3　Bさんの背景

活動当時は26歳で、知的障がいを伴う自閉症の男性である。8歳から月2回、個人音楽療法を実施し、現在（2021年10月時点）も継続中である。特別支援学校高等部を卒業後は就労し、社員食堂の厨房スタッフとして働いている。

音楽療法では、20歳を機に音楽療法士とBさんの関係性を音楽療法士とクライエントではなく、同じ場に集い共に活動をする人たちという対等な関係性であることを本人・保護者・音楽療法士との話し合いで確認し、互いの呼称を「○○（名前）さん」としていた。

Bさんはパフォーマンス能力に優れており、声や身体を思うままに操るその姿はとても生き生きとしていて、周りを惹きつけ巻き込むような力があった。個別音楽療法では主に、即興劇、各々の表現鑑賞、共にパフォーマンスを考え第三者に披露をする、といった活動を行っていた。

Bさんの趣味は、料理やお菓子作りであり、そのことについて話す際には、とても楽しそうにパフォーマンスを交えて伝えてくれるのだが、仕事の厨房スタッフに関わる料理の話をするときには、表情も変えず単語一言で答えるのみであった。どちらも同じ料理という内容であるにも関わらず、答えるBさんから受ける印象は異なっていた。その様子から、業務としての料理と趣味である料理のプロセスは、Bさんにとっては質の異なる作業である可能性が窺われた。このことに関して実践を通して共に経験しなおすことは、Bさんにとっての仕事とは何か、そして周囲の人たちがBさんをどのように捉え、どのような関係を築いているのか、それらの状況はよりよい方向に変化していく可能性があるのかを模索する重要な機会になるのではと筆者は考えるようになったのである。

3．計画

以上の背景から、筆者は実験カフェを発案した。目的は、リソースを活かした仕事につ

いて考えること、人々が知り合い共存できる場所について考えること、Cl. 本人を含めた様々な関係性の人たちが話をすることである。

場所は、筆者の友人が所有する厨房とカフェ、音楽フロアがある貸スペースを利用した。カフェスタッフは、ウェイトレス（Ａさん）、ピザ職人（Ｂさん）、店員（音楽療法士３名）、店長１名（貸スペース家主）、バリスタ（筆者友人）である。ウェイトレスとピザ職人の業務内容については、筆者が概要を考案し、音楽療法の時間の中で各々と当日まで相談をして決定した。

Ａさんは、親しみの持てる笑顔、文字の読み書き、簡単な会話が可能であること、そして本人の願望でもあった接客業、これらが活かされるウェイトレスとして、フロアにて接客と会計業務を担当した。Ｂさんは、料理が趣味で、また就労においても、厨房での料理を担当しているため調理スタッフを担当した。その姿を来店者に分かりやすく見てもらうため、メインメニューをピザにし、生地成形の工程をパフォーマンスする場面を設けた。その後、ピザの生地に具材を乗せる、オーブンで焼き上げる、プレートにサラダと焼き上がったピザを盛り付けるところまでを行う（写真１）。

写真１

店長とバリスタは、会社は異なるもののＢさんの就労先に関わりを持つ業種に就いており、Ｂさんの雇用形態についても熟知している人物である。

スタッフ間で目的を共有し、実験カフェの意義を、音楽療法士を中心に話し合い、店内に設置する案内の文章を作成した。内容は以下のとおりである。

私達はできることをやります。

難しいこともあります。例えば物を持って段差を降りることとか。

その時はお手伝いをお願いするかもしれません。

皆さんのアイデアと私達のアイデア
お互いの持っているものでちょうどいい感じの店を作りたいです。

「仕事を考える」というテーマから、給与支給を行うため、愛知県の最低賃金を調べ、時給を設定し、人件費を基にメニューを検討、価格を決定した（写真２）。

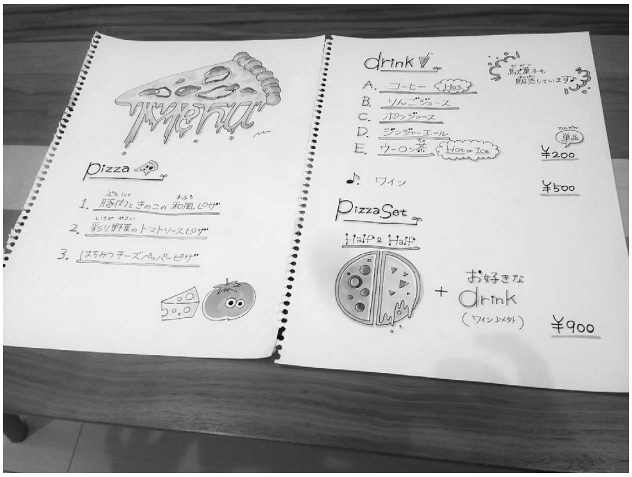

写真２

４　実験カフェの結果

4.1　Ａさん

開店前、自分で選んだウェイトレスの制服を着用して、スタッフに「どう？」と尋ねては、笑顔をみせていた。普段会う筆者と、会ったことのある音楽療法士には、自分から関わることが出来るが、初めて会う店員とは物理的な距離を取り、自ら関わりにいくことはなかった。客が来店すると「いらっしゃいませ」と自発的に発し、店員と共に出迎える姿がみられた。客のためのマグカップを選ぶこと、注文を覚えて店員に伝えること、会計のために客に声をかけ、お金を受け取ること、どの作業も客一人ひとりとのやりとりや、時には店員を頼りにしながら、形式的なものではなく、その時毎のＡさんの対応があった。戸惑いと思われる場面では、「ちょっと」や「〇〇（店員の名前）」といった決まった言葉を発し、助けを求めるような行為を表出することが可能であった（写真３）。経験の中でＡさんが出来ることが増え、店員側はそれを把握していくことで必要な促しが変化していくと感じていた。はじめは、身の置き場が定まらず筆者の名前を呼ぶ、探す、筆者の近くに寄ってくるという行為があったが、時間の経過と共にＡさんと主に関わっていた店員とのやりとりが増え、自然と店員の近くで共に過ごすようになっていた。１組目の来店者が客席でＢさんと会話している際には、少し離れた場所に店員と一緒に座ってその様子を眺め笑顔で過ごしていた。Ｂさん家族が来店した際には、同世代のＢさん姉妹がカウンター

席に座ると、カウンターの傍まで自ら寄っていき姉妹の談笑している時間を共に過ごしていた。Ａさんの家族が来店した際には、自分の姿を家族に向けて「どう？」と笑顔で発する場面が度々出現していた。Ａさんの姿を家族が写真撮影している場面では、Ａさんはとても嬉しそうにポーズをとっていた。Ａさん家族と筆者が会話をしていると、筆者の横に座り一緒に笑顔で会話に参加していた。

写真３

4.2　Ｂさん

ピザ生地の成形の方法はすぐに覚えることができており、生地を伸ばしながら空中へ投げる際には「それ」「よっ」等の掛け声を交え、時折「よし、いいぞ」「だんだん出来てきた」等の手応えを笑顔で言葉にしながら取り組んでいた。盛り付けではバリスタの手本を基に、彩りや配置を参考にしたＢさんなりの盛り付けに仕上げていた。Ｂさんが知らない１人目の客の調理中に、客に対する質問を筆者に問いかけることがあった。Ｂさんは過去に骨折した経験があるのだが「骨折すると痛いよね。骨折したことあるかなぁ。」と筆者に尋ね、筆者が「そうだね。痛いよね。骨折したことがあるか聞いてみたらいいんじゃない？」と伝えると、注文の調理を終えた後に客席へ行き「骨折したことある？」と尋ね、そこから少しの間、会話をしていた。以前に筆者とは骨折の話をしたことが数回あったが、他の店員には尋ねることはなく、１人目の客に対してだけその会話を行ったことがとても印象的であった。調理業務が無い時間には客席のある空間へ行き、歌を歌う・楽器演奏をするといった行為が見られた。その行為から客との会話に繋がり、リクエストに応える、共にピアノ演奏するといった事象が、客との間で発展していった。その姿は個人音楽療法の時間の中でみられるＢさんの姿そのものであった。Ｂさん家族の来客時には、Ｂさんのパフォーマンスの勢いは高まり、行為の種類が増えていた。客と店員、その場にいた全員がＢさんの行為に注目し、声を発する、手拍子をする、Ｂさんと同様の行為をする

等、各々の関わり方が発生しており、Ｂさんの行為によってそこにいる全員が一体となって楽しんでいるような時間であった。

4.3　店長やバリスタとの関わり

Ａさん Ｂさんとは初対面であった店長とバリスタとの関わりについて、店長とバリスタ側の動きを交えて記述する。店長は、状況に合わせてフロアの中を移動し、その都度異なる居場所を設けていた。バリスタは、珈琲をいれるための道具が置いてある珈琲スペースを拠点とし、フロア内での様々な事象に身体の向きを変え視線を向けて過ごすことが主であった。

Ａさんは、筆者を含む店員（音楽療法士）３名との関わりに対しては各々に差はあるものの、物理的な距離をとることはなかった。しかし、店長とバリスタに対しては、空間を移動する際など、互いが関わるためではないが近づくことがあると、すぐに離れるように動くことがあった。これはＡさんが意識的に物理的な距離をとっているのではないかと察していた。Ａさんは人によって笑顔の表出頻度や表情が異なっており、それは親交度が影響しているように思われた。店長とバリスタに対しては緊張のような表情が含まれており、筆者に対して向ける表情とは異なっていた。店長とバリスタは、Ａさんに対して必要に応じて関わりを持ちながら過ごしていると、はじめは気にかかっていた距離感と表情は、他店員との差はあるものの、時間の経過とともに気になることが無くなっていた。またＡさん自らバリスタのいる珈琲スペースへ近づき、その場で過ごすといった行為も見受けられるようになった。

Ｂさんは、相手によって関わりが大きく変化はすることはなかった。店長とバリスタは、はじめはＢさんと直接的な関わりを持つのではなく、少し離れたところから視線を向け、Ｂさんの様子を観察するような態度であった。Ｂさんの振る舞いには初めから自然と笑顔が表出され、時間の経過とともに物理的距離が変化しており、相互行為もみられるようになっていた。バリスタは、Ｂさんの調理の様子を少し距離のあるところから見守り、時折近くまで寄ることもあった。次第に横並びになって見守るようになり、Ｂさんと会話をするような場面もみられるようになっていた。Ｂさんが厨房にいるときは、Ｂさんの近くで共に過ごす時間が増えていた。店長は、Ｂさんが厨房にいるときは上体を前に乗り出すような姿勢で様子を見ていることが多々あった。また、カフェスペースでＢさんが過ごしていると、Ｂさんが見える場所を選んで座り、Ｂさんの行為に対し常に笑顔を向けていた。Ｂさんの名前を呼び、話しかけるような場面もあった。店長がカウンターにて食事をしていると、カフェスペースとカウンターを区切る壁に設けられた空洞から、Ｂさんが店長に手を伸ばし握手をするといった行為もみられた（写真４）。店長とバリスタは、Ｂさんとの関わりを各々で変化させていたのである。

写真４

５．考察

5.1　バリスタの感想から実験カフェを再考する

実験カフェについて終了後にバリスタから寄せられた感想を以下の表１に記す。表にも付記したように、感想のナンバリングはバリスタ本人が記入したものである。

まず、一つ目は、バリスタのこれまでの生活における障がい者と接する機会についての記述であり、二つ目は、障がい者の方に対する実験カフェ以前の印象である。三つ目は、実験カフェによりこれまでの障がい者に対する印象が覆された経験に関するものである。バリスタはこれまでの生活において障がい者と接する機会はなかったと述べている。このことは、二つ目に述べている障がい者へのマイナスな印象に影響していることが窺われる。つまりその印象は、自身が障がい者と接した経験からではなく、「障がい」という言葉から生じている可能性がある。2.1において筆者は、障がい者に日常的に接する機会が少ない現状が、障がいについての理解や価値観が深まらない原因となっているのではないかという問題意識を示したが、このバリスタの感想とも通ずるものである。しかし、バリスタのＡさんやＢさんに対しての印象は、実験カフェでの経験を通してポジティブなものに転じている。このように実際の関わりを通してこそ、本当の意味での価値観や思想が形成されていくのではないだろうか。

次に四つ目は、Ｂさんと家族との関わりから、障がいに対する理解と支援についての考えを記述したものである。実験カフェにおいてバリスタはＡさんとＢさんという異なる個人にそれぞれ接する中で、自身の振る舞いを考えながら行動していた。そのことが「受け入れる側もフラットな姿勢で自然体となり、それらを行動として表すことが双方の関係性の向上に繋がるのではないだろうか」という実感に繋がっていたのではないだろうか。また、それによってＡさんとＢさんも個人としてのバリスタを受け入れ、自然に距離を縮めていったのではないかと筆者は考えている。

表１．バリスタの感想全文

1	これまでの生活を通じて積極的には障害者の方と接する機会はなかった。これは学生時代、障害者クラスは別であり、会社でも同じ職場で障害者の方と一緒に働くタイミングがなかったことによる。そもそも日本の社会は障害者の方との協働を推進していない現状がある。そのため、障害者の方に対し特別な感情は持っていないし、あまり意識を向けていなかった。
2	障害者の方に対しては、意思の疎通が図れない感情が優先され、理性が抑えられない衝動的な感情と行動、コミュニケーションが図れない一方的なコミュニケーション、相手の気持ちを考えないマイペースな姿勢などマイナス印象が気持ちを支配していた。また、今回の実験カフェでも何か特別な意識をしないといけないのではないかといらない心配をしていた。カフェ、調理と接客の仕事も１から10まで全て何度も教えないと理解をしてもらえないのではないかと思っていた。
3	実験カフェで思ったこと、Ｂさんはとにかく感情が豊か。これは一般的な健常者よりも遥かに顕著であり、特に笑顔の時間が多いいつも笑っている印象。これはきっと周囲（家族・接する全ての人）に暖かい空気をもたらすのだと思う。生き生きとやりたいこと、興味があることの気持ちを発信することができ、夢を持ち、意思をはっきりと示すことができる。正確にルール通り仕事ができているわけではないが、感性で仕事をする調理や接客は受け入れられ、受け入れられやすいと思った。自身の意思を持って生きていることに驚いた。やりたいことイコール、自己実現のニーズを持って行動として形に実行されているのはすごいと思った。社会人のどれだけがその意思を示せるのだろうか。これが今回実験化をやって新たに芽生えた感情。
4	周囲の理解、家族の存在は大きいと思う。家族が来たとき、Ｂさんの嬉しそうな表情と、それを全身で表現する様子から、本当に家族の仲がいいのだと伝わった。個性をつぶさず、むしろ個人の個性や特徴をしっかりと理解し、見守り、受け入れている家族との絆にすごく感動をした。本当に理解のあるご両親だと思う。個性ややりたいことをチャレンジさせようとする気持ちを持っている。イメージとしては、障害者の家族は育てることが精一杯で、本人の意思ややりたいことまで考えが及ばないのではと思う。周囲の援助や助けは必要であり、これは自立をしてもらうためには必要であることは間違いない。しかしＢさんは笑顔を通して周囲に元気を与えてくれる存在でもある。これは、お互いがお互いを理解し、認め合えているからこそ成立する関係性なのだと思う。Ｂさんも自分が家族の中での位置づけを理解しているように思う。ご家族の苦労は絶えないし、その立場にならなければ理解をすることは困難だ。受けいれる側もフラットな姿勢で自然体となり、それを行動として表すことが双方の関係性の向上に繋がるのではないだろうか。
※バリスタ本人によるナンバリング 「ここでの障害者という言葉は、知的障害者を想定している」という但し書きあり	

5.2　コミュニティ音楽療法から実験カフェを再考する

Ａさん・Ｂさんと知り合い、共に働いたバリスタは「感性で仕事をする調理や接客は受け入れられやすい」と述べている。Ｂさんの業務のひとつである盛り付け作業は、手本はあるもののそれを忠実に再現するのではなく、参考にしながらもＢさんなりの盛り付けに仕上げていた。これについて、スタッフは完璧な再現を求めることはしなかった。むしろ、その盛り付け一つひとつの出来上がりを目にすることを楽しみながら期待していた。また、Ａさんは必要に応じて助けを求め、スタッフはＡさんの様子からその都度どこまで

サポートするかを判断しながら関わり合っていた。時には客とのやりとりの中で手伝いを求め、客がそれに応じる場面もあった。スティーゲは、健康の関係的概念について説明する中で、以下のように言及している。

　ある社会システムの成員が逸脱に対してどの程度まで寛容、あるいは不寛容か、ということである。問題や行動が寛容、理解、そしておそらくは誘因へのケア、周囲の社会的環境からのサポートによって迎えられるならば、より寛容でない社会的コンテクストの場合と比して緊張も要求も実質的に小さくなるであろう[2)]。

　あるいは、以下のようにも述べている。

　健康は個人の所有物に留まらないことを強調しておきたい。日常生活で出会う困難を処理し乗り越える個人の能力は、個人のみならず状況にも関連している。健康は関係的概念である。すなわち健康とは他者との関係、要請と困難との関係、社会的、組織的、文化的、社会システム的なコンテクストとの関係を有する。逸脱への鷹揚さを持たない有無を言わさぬ要請と文化が作用しているコンテクストでは、学校、仕事、社会生活への参加から個人を排除することになる。健康を理解するためには個人、彼または彼女のコンテクスト、個人とそれらコンテクストとの関係を理解することが肝要である[3)]。

　実験カフェは、逸脱に対しての寛容さの意義を示す試みであったと考えられる。もし、ピザ職人あるいはウェイトレスのあるべき姿を求めていたら、Aさん、Bさんは不寛容な状況にさらされ、その行為は逸脱としてカテゴライズされるかもしれない。Aさん、Bさんに対する行動変容の要求は高まり、特に状況や人によって理解や表出が変化するAさんにとっては、緊張や不安を感じ、思うように振る舞えない安全でない場になることが想像される。社会一般と照らし合わせた基準によって逸脱と捉えられかねない場で、本来の力を発揮できないのはAさんに限ったことではないであろう。実際、Aさんは寛容、理解、ケア、サポートによって迎えられることで、ウェイトレスの仕事は可能であったし、主体的に取り組む様子も多くみられた。

　次にスティーゲは、社会的ネットワークについて概説する中で、ミッテルマーク他（Mittelmark et al., 2004）を参照しつつ、以下のように述べている。

2）スティーゲ，ブリュンユルフ、オーロ，エドヴァルド・レイフ著、杉田政夫監訳　伊藤孝子他訳『コミュニティ音楽療法への招待』風間書房、2019年、98～99頁。

3）スティーゲ他前掲書、102～103頁。

> もし片方が常に「支援者」であり、もう一人が常に援助やサポートを受けていれば、その関係は相互作用用性を欠くものと特徴づけられるし、両者にとって潜在的なストレスの原因ともなり得る[4)]。

実験カフェは、個別音楽療法におけるセラピストとクライエントの関係ではなかなか到達できない、相互サポート関係を全員が経験する場となっていた。筆者らはＡさんＢさんの「業務」がうまくいくことを一方的に援助するのではなく、それぞれがリソースを持ち寄って、おいしいピザとコーヒーを作って客に食べてもらいたいと思っていた。バリスタはコーヒーの焙煎が趣味であり、筆者は料理レシピを考案するのが元々好きであった。カフェ店員の経験がある音楽療法士も参加していた。ＡさんＢさんも含めた全員が自分自身の関心やできることを持ち寄って場に関与していたのである。このことにより、一方的なサポート関係が自然に回避されたと考えられる。お互いが必要な場面でケアしあうことで、バリスタの感想にもあったように「フラットな姿勢で自然体になり、双方の関係性の向上」につながったのではないだろうか。

またスティーゲは、医学モデルではなく社会モデルを理論構築において一つの軸としており、以下のような主張をしている。

> 「行為の可能性」は、個人的問題のための挑戦のみならず、社会の構造的な障壁への挑戦でもある[5)]。

実験カフェは、計画から実践まですべての行為が、挑戦であった。ＡさんとＢさんが社会の中で生きていくことを考えたとき、様々な挑戦を要請されるかもしれない。その一つひとつは個人の問題なのか、社会の構造的な面から生じているのか、考えながら挑戦することの重要性を深く認識する試みになったと感じている。

おわりに

音楽療法室内における MT. と Cl. という図式は意図せずとも関係性が固定化しやすく、筆者はＡさんとＢさんとの関わりにおいてそのことにもどかしさを感じていた。実験カフェは、その関係性を解きひらく糸口を探し出せないかと模索したプロセスであり、Cl. の生活にとって必要な場の構築を共に経験する試みであった。そこでは、支援する側でもされる側でもなく、個々人の在り方が流動的であり、その流れによって場が展開されていた。バリスタと店長にとっては、共に過ごす中で「障がい者」というラベリングを通したＡさんＢさん像からの脱却が自然に生じ、個々の人間としてのＡさん、Ｂさん、そ

4）同上、137頁。
5）スティーゲ他前掲書、21頁。

して自分の関係に気づく過程であったように思う。彼らの気づきから、障がいについて理解するということは、障がい名が表す固有の特性を知ることだけではなく、個々人との関わりにおいて、障がいの有無がおおよそ重要ではないという認識を相互に持つことなのではないかと改めて感じた。障がい者支援は、ともすれば障がいを持つ側が社会に適応できるよう支援者に支援されるという関係性を生みやすいが、障がいを取り巻く状況の理解は、一方的ではなく社会で生きる一員同士として共に取り組むことで深まるものだと考える。そのため、音楽療法士が生態学的な観点を持ち、Cl. へのアプローチと同時に、その取り巻く環境に対しても関与していくことは、非常に重要な行為であると言えるだろう。

自身の音楽療法においては、個別音楽療法を含んだ日々の実践を継続しながら、今回のような必要に応じた試みと省察の往還を継続していくことで、音楽を通した社会的健康、すなわち障がい等に対する社会的価値観の転換に向けて貢献できるよう模索し続けたいと考えている。

主要引用・参考文献

スティーゲ，ブリュンユルフ、オーロ，エドヴァルド・レイフ著、杉田政夫監訳　伊藤孝子他訳『コミュニティ音楽療法への招待』風間書房、2019年。

杉田政夫、伊藤孝子、青木真理「ノルウェーにおけるコミュニティ音楽療法の今日的展開に関する研究――スティーゲへのインタビュー及び実践現場への訪問調査を中心に」『福島大学地域創造』第32巻２号、2021年。

Mittelmark et al. (2004). Chronic Social Stress in the Community and Associations with Psychological Distress: A Social Psychological Perspective. *International Journal of Mental Health Promotion*, 6, pp. 4–16.